

説教 『癒し、伝道、再創造』

聖書 イザヤ書 35:5~6 / マルコ福音書 7:31~37

「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く(イザヤ35:5)」。預言者が告げる「そのとき」とは、終りの日のこと。「終りの日」とは世の破局ではなく、御手による再創造であり、「歩けなかった人が鹿のように躍り上がる～荒れ野に水が湧き出でる(35:6)」と表現される。

イエスの癒しの業は虐げられた者の解放だが、それはまさに終りの日到来の徴である。そして現在に至っている。

イエスはシリア・フェニキアでギリシア人の女の願い(マルコ7:26)を叶え、デカポリス経由でガリラヤへ戻って来た(7:31)。つまり、地域や民族などは何でもなく踏み越えられ、「人々はかえってますます言い広める(7:36)」ことになる。

私たちが証しするキリストは、暗黙の裡に想定している領域や枠組みには納まらない。伝道の成果は、伝道する者の狭い感覚を、裏切るように超えて実現する。祈ってその通りにならないと思うのは、あらかじめ想定している「狭い願望」に納まらないからなのだ。

「人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来て、その人に手を置いてくださるようにと願った(7:32)」。だがイエスがなされたことは、それ以上だった(7:33)。

親切な人々にとって、そしておそらく当人も、手を置いてもらう祝福で慰められる程度を期待していた。ところがイエスは、その期待を踏み越えて、苦しみの根本を実際に治癒させる(7:35)。

ここでも人々の「狭い願望」が打ち破られた。

その聾啞者はどうなったか。「すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができるようになった(7:35)」。

直訳的に言うなら「聴覚が開き、舌の拘束が解かれ、規則正しく話すようになった」。言葉のイメージから、聾啞者は「閉じ込められていた」らしい。

社会制度からか、自己の心的混乱からか、憑いた悪霊からか、いずれにせよこの人は何らかの拘束から解き放たれた。

「イエスはこの人だけを群衆の中から連れ出す(7:33a)」。宣伝効果のあるデモンストレーションではない。大胆だが素朴な、心のこもった癒し行為だ(7:33b)。

イエスは「天を仰いで(7:34)」神と結び、「深く息をついて(7:34)」聖霊を呼び求める。そして「エファッタ(開け)」と具体的な言葉を発する。

私たち一人ひとりに、このように接するイエス。ローマ法皇からすれば私は大群衆の一粒だが、イエスは法皇の所にはおらず、群衆にまぎれて私の肩を「よう」と叩く。

空腹ならば「めしを食いに行こうや」と連れ出し、体が不調ならば「どれ、ひとつなおしてやろう」と汗びっしょりになって「頑なさ」を揉みほぐしてくれる。

耳が閉じられていれば「指を差し入れて(7:33)」開かせ、舌が拘束されていれば「唾をつけてそこに触れて(7:33)」解き放つ。神の再創造は、このようになされていく。

今日の箇所では、聾啞者と私たちとを重ね見た。第一義的にはそうだろう。だがそれだけではない。私たちは、聾啞者をイエスの許に連れて来る「人々」である場合が多い。

伝道とは「誰か」をイエスの許に連れて行き、「その上に手を置いてくださるよう願う(7:32)」ことではないか。その成果は、私たちの期待値を超えて起こる(7:35)。するとすっかり驚いて「イエスが口止めされればされるほど、人々はかえってますます言い広める(7:36)」。こうした無邪気な罪が、やがて十字架を招くことになる。



《おまけのひとこと》

天を仰いでの神 息をついての聖霊 そしてイエスは私たちに触れる 具体的に 個別に 状況に応じて三位一体が現れる 教理が先にある三位一体ではない 現実の輪郭によって形成された